他者という規制装置

――『源氏物語』を題材に――

鷺山（サギヤマ）　郁子（イクコ）

今回の国際研究集会のテーマは、未曾有の惨事となった東日本大震災を意識しての、大変重い、深刻なものと受け止められる。副題の「日本文学は何を発信できるか」という問いも、私のように外国で日本文学を教え、また紹介する職についている者が、常に自分自身に課さなければならないものだが、目前の諸事に追われて、つい看過しがちである。あらためてこの課題に向き合う機会を与えて戴けた事に感謝したい。

震災は、もちろん、イタリアでも大きく報道されが、そこでしばしば見られたのは、日本人が dignità、英語ではディグニティを持って、この苦難に立ち向かっているというコメントで、イタリア大統領を始め、諸氏の言葉に、繰り返し現れた感想であった。

この表現自体は、こういった災禍に見舞われた人民の勇気をたたえる意味で、一種の決まり文句でもあるのだが、意外に日本語に訳しにくいタームで、管見しただけでも尊厳、威信、品位など様々な訳語が提案されている。現在、一般的には、また、特に今回のような場合には、尊敬に値する、尊敬の念を起こさせる毅然とした態度、困難にあってくじけたり、自暴自棄になったり、あるいは他者に責を負わせて自己努力を怠ったりせず、理性をもって状況を把握し、受け止め、勇気をもって対処しようとする態度と言ってよいかと思われる。確かに、泣き叫んだり、怒りをぶちまけたりといった衝動的な反応を抑制し、ましてや支援物資の奪い合いや火事場泥棒的な行いを自粛する日本人被災者の態度は、しばしば報道の対象となり、皆の感動を呼び起こすものであった。私自

身、さもあらんと思わせられた事も事実だが、また同時に、それが依って立つところはどこなのかも考えさせられた。

古代ローマの哲人セネカに「苦悩の中でディグニティを保つ」と称される文章がある。『心の平静について』の中の一節で、セネカ自身がそう呼んでいるわけではなく、イタリアの高校の教科書に採用された際にそう表題が付けられた、というだけのようだが、その中でセネカは、あれこれ個々の悲しみではなく、人間の存在自体に絶望した場合、どうするかという事を言い、その時は、泣くのではなく、笑ってしまえ、と説いている。ところが、周知のように、日本文学は涙に充ち満ちていて、なかなか笑うどころではない。しかし、私の勝手な拡大解釈でこれを、絶望的状態にのめり込まずに距離を置いてそれを見直す事、ととると、日本の場合は恥の意識、言い換えれば他者の視線を意識することで自分自身を律するという心的作用が働いているのではないか、という事に思い当たる。いずれにしても、突発的に生じたものでない限り、古典文学にもその痕跡が認められるのではないか、ここでは『源氏物語』をてがかりに、その機微を少し探ってみたいと思う。

『源氏物語』は、人笑へ、人わろし、はしたなし、はぢがかまし、面なし、名だたし、面伏せ、人聞き、世の聞こえ、等々、体面に関わる用語で充ち満ちており、危機的状態そのものより、それがどう世間に取りざたされるかが思惟を規制するという展開があちこちに見られる。ここでは、「人笑へ」を主な手がかりとし、恥意識がいかに登場人物、特に女君たちを深刻な事態に押しやるか、そこに追い詰める他者は、敵方の人物あるいは漠とした悪意の世間のみではなく庇護者や味方たるべき人々でもあり、当事者は孤立せざるを得ない事、その中で、あらたに自分の生き方を探る時に獲得される矜恃、といった経過を見てみたい。

「人笑へ」あるいは「人笑はれ」というタームは、源氏物語のキーワードの一つとして、既に様々に考察されている。[①] それ自体は、人に笑われる、という

意味なのだが、これがいかに致命的な意味合いを持つ場合もあるかは、以下の藤壺の思惟に端的に表れている。

> よろづのこと、ありしにもあらず変わりゆく世にこそあめれ、戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ、など世の疎ましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思しとるに（賢木② 114 頁）[②]

ここで引き合いに出される戚夫人とは、『史記』にあるように、漢の高祖の寵姫で、高祖死後その糟糠の妻である呂后により投獄の上、手足を切り落とし、目を抉り、耳を焼き、声を奪い、豚小屋に閉じ込め「人彘」（ひとぶた）と呼ばせるといった、凄惨な報復にあう。太子候補であったその息子も、もちろん、殺される。没した先帝の寵愛、古くからの后妃の嫉妬、立太子を巡る争いといった類似関係から、ここで思い起こされる必然性は充分あるのだが、「そこまでは行かなくとも」という但し書きがあるにせよ、こういった凄まじい報復行為の故事が「人笑へ」と並置されるというのには、やはり驚かされる。夙に柳田国男が『笑いの本願』で、笑いが他者に対する「一つの攻撃方法」であり、「殊に日本人では人が笑ひ自分が笑はれる不幸を痛感する人が多かった」[③]と指摘しているが、ここにおける「人笑へ」は、身体的傷害、抹殺にも比される身の破滅を示唆している。それを恐れて、藤壺は出家という思い切った行動に出るわけだが、同じ藤壺には、これ以前にも、以下の思惟がある。

> 命長くもと思ほすは心憂けれど、弘徽殿などのうけはしげにのたまふと聞きしを、空しく聞きなしたまはましかば人笑はれにや、と思しつよりてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。（紅葉賀① 325 頁）

事悪しかれと呪っている弘徽殿が、自分があっけなく死んだと聞いたら我が

意を得たりとあざ笑うだろうという思いが、藤壺を快方に向かわせるわけだが、ここでも、嘲りを受ける事を何としても避けようという意志が彼女の行動を規制する。「人笑へ」の回避を行動の指針にするという構造は、既に先行研究で指摘された通り、一つのパターンとして特に女性登場人物にしばしば見られる。しかし、藤壺の場合は、中宮かつまた東宮の母という、いわば政治的な力関係の枠組みの中で、後に冷泉帝となる不義の子を守り抜く強靱さを身につけて行く点が際立っている。

これに関連して思い起こされるのは、源氏が須磨で嵐に見舞われ気弱くなった折に、「かかりとて都に帰らんことも、まだ世に赦されもなくては、人笑はれなることこそまさらめ」（明石② 223 頁）と思い留まり、さらに明石入道の迎えに対し「まことの神の助けにもあらむを背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれなる目をや見む」（同 232 頁）と明石行きを決意する、いわば政治的進退を考量する場合で、ここには「人笑へ」意識に基づく決断をバネとして、不義の子である東宮即位という大それた意図を実現するに至る藤壺、源氏のしたたかな精神的紐帯さえも認められるように思われる。この両者の場合、他の大多数の登場人物と異なって男女関係、女性の場合は特に身分に合わない婚姻、男に見棄てられる、というこの二点だが、それに絡んだものではない事が注目され、その意味では例外的と言えるのではないかと思う。

『源氏物語』における「人笑へ」あるいはその受信形の「人笑はれ」が、さほど重い意味を持たない場合もあり、これは男性人物に特徴的なようで、彼らの場合、女君たちとは違って恥の意識が身の憂さ、拙い宿命への沈思につながる事はない。「人笑へ」が、「女の内面思考の言語」④と見なされる由縁である。

男性の思惟に「人笑へ」あるいは「人笑はれ」が現れる場合、熱心に懸想していた女性を手に入れ損なったのが外聞が悪いというケースも見られるが、⑤頻度が高いのは娘の処遇についてである。内大臣、かつての頭中将の場合、五度に渡って「人笑へ」「人笑はれ」が現れるが、全て娘である雲居雁の身の振り方を案じるコンテクストで、そこにおいて笑われる対象が誰かを見ると、娘そ

のものより父である彼とその一家の方をより意識して、すなわち家長意識を基にしているように思われる。父の思惑の中では、娘の処遇が一家の対面という地盤で忖度されるという構造が認められ、それは他の男性人物にも共通する。

髭黒北の方の父、式部卿宮は、娘が玉鬘出現により屈辱的待遇を受けていると立腹し、実家へ戻るよう、強く要請する。

> 今は、しかいまめかしき人を渡してもてかしづかん片隅に、人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでも、ものしたまひなん（真木柱③ 358 頁）

「人」わろし、「人」聞き、「人」笑へと、若いライバル出現で夫から軽んじられる事を、徹底して世間の目というパラメーターで計っており、実家に戻れば、自分が式部卿宮という権威でそれを防げられるとするこの論理には、皇統という「家」の格式意識が強く表れている。同じ内容が、用語もほぼ同じくして後にも繰り返される。

> 今は、しかかけ離れてもて出でたまふらむに、さて心強くものしたまふ、いと面なう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづほれたまはむ。（同 370 頁）

髭黒北の方は、いわば源氏の敵方にあり、更に物の怪に悩まされる身という、負の属性を強く負わされた人物として造形されており、「人笑へ」になる資格は充分すぎるほど備えているのだが、ここには家や身分意識を根底とした男性の介入がそれを彼女に深刻に受け止めるよう迫ってゆくという構図が見られる。類似の状況が夫髭黒との関わりにも認められる。

> とてもかうても、今さらに心ざしの隔たることはあるまじけれど、世の聞

こえ人笑へに、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを、年ごろの契り違へず、かたみに後見むと思せ（同 361 頁）

父は、夫のもとにいては物笑いになると言い、夫は父の許に戻ればそうなると言う、双方から物笑いを申し立てられては立つ瀬がなかろうと思われるが、この髭黒の言葉も、妻の体面を気遣っているように拵えてはあっても、「まろがためにも」に明らかなように、実際は自分の不面目を危惧する気持ちがあり、この点は、後に物の怪の発作に見舞われた妻のもとに「あるまじき疵もつき、恥ぢがましきことかならずありなんと恐ろしうて寄りつきたまはず」（同 369 頁）という彼の態度が証す所である。北の方は、初めは「世の人にも似ぬ身のうきをなむ、宮にも思し歎きて、今さらに人笑へなることと御心を乱りたまふなれば、いとほしう、いかでか見えたてまつらんとなむ。」（同 361-362 頁）と、自分のせいで父が物笑いを嘆くのが辛く、顔向けができないと言って髭黒の邸に留まるが、上述のような物の怪騒ぎの折の夫のあしらいに、その慰めや誓いが空言であった絶望感から、「強ひて立ちとまりて、人の絶へはてんさまを見はてて思ひとぢめむも、いますこし人笑へにこそあらめ」（同 370 頁）と、やはり「人笑へ」を根拠に宮家に戻る。

この傍系人物の話は、娘である真木柱に後続するにせよ、[6] それ自体の発展はなく打ち切られるのだが、ここには他の登場人物に連環するいくつかの要素が認められる。特に庇護者が被庇護者の進退、処遇に悩むというコンテクストにおける「人笑へ」というタームの表出は、明石の君と姫君、一条御息所と落葉宮、真木柱と連れ子の宮の御方、玉鬘とその大君、宇治の大君と中君、中将の君や乳母と浮舟、といった女性同士の関係にも広げることができる。その際、庇護者の恥意識が被庇護者を追い詰めて行くような形を取るケースがままある。

落葉宮は、皇女の身で臣下である柏木に降嫁し、若くして未亡人になった自分の境遇を嘆くが、当人よりも母である一条御息所の方が「いみじう人笑へに口惜しと見たてまつり嘆きたまふこと限りなし」（柏木④ 319 頁）とあり、見

舞いに訪れた夕霧に対し、「何かは、かかるついでに煙にも紛れたまひなむは、この御身のための人聞きなどはことに口惜しかるまじけれど」（同 331 頁）、いっそ夫と一緒に死んでしまった方が当人の外聞も良かったろうに、とまで言う。これは、後に浮舟の侍女、右近が口にする「死ぬるにまさる恥なることも、よき人の御身にはなかなかはべるなり」（浮舟⑥ 179 頁）という言葉に遠く呼応するものだが、落葉宮の場合、内親王降嫁は好ましくないとされた社会で臣下に嫁ぎ、そのあげく夫に先立たれるという事が、取り返しのつかない程恥ずべき零落と見なされるわけである。[7]

落葉宮は、あまつさえ夕霧の強引な懸想で更なる窮状に立たされるのだが、ここでも母御息所が、娘が皇女の身で二夫にまみえ、その二番目の男に一夜で棄てられるという恥を嘆ずるあまり悶死するに至る。実は、夕霧が落葉宮と関係を持つのは御息所死後であり、この母の苦悶は誤解に基づくもので、実際、当事者の落葉宮自身は、まだ過ちは犯していないという自覚から「すこし思し慰むる方」（夕霧④ 422 頁）もあるのだが、母は「人の御名をよざまに言ひなほす人は難きものなり。底に心清う思すとも、しか用ゐる人はすくなくこそあらめ」（夕霧④ 424 頁）、自分が潔白だと思ったところで、悪い噂が立った以上は取り返しがつかないと、これも徹底して世の聞こえを論理の中核に据える。事実そのもの、またそれに基づく自負などは、世間の悪意ある取りざたの前には何の意味ももちえないという、まことに厳しい現実認識は、娘のかろうじて保つ矜恃もあっさり否定するものである。家の中の家である皇族という出自が、それに見合う尊厳と誇りの維持という義務を伴う事、それを代弁する者として、その重責を娘に喚起する役割を持つという点で、この人物はさきの式部卿宮に通ずるが、その焦慮が結局は娘を窮地に立たせ、その悩みを増幅する作用を持つことも共通する。

これは、宇治の大君が、亡父八の宮の遺戒を想起する場合にもあてはまる。「わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御表伏に、軽々しき心ども使ひたまふな」（椎本⑤ 185 頁）という父の言葉を、総角巻で大君が中君に向かっての

会話で「なかなか人笑へに軽々しき心つかふな」（「総角」⑤245頁）と言い換えるのが、この女君の「人笑へ」意識の最初であるが、同じ総角巻の中だけで全六回、この言葉が彼女の思惟を規制し、原岡文子氏が鮮やかに指摘されたように「大君の恥の意識の半ばむなしい自己増殖を自ずと物語り、やがてその中から、恥を忌避するために死の選択の論理が紡がれていく」[⑧]ことになる。思わずに匂宮と結ばれた中君が、男に見棄てられるのではないかという大君の恐れは、「人笑へにやと思ひ嘆きたまへば」（同289頁）、「やうのものと、人笑へなることをそふるありさまにて」（同300頁）、「かばかり人笑へなる目を見てむ人」（同301頁）と危惧から確信に発展する。実際は、当事者である中君は夜離れが続いても匂宮の契りの言葉に信を置こうとしており、匂宮の志も並々ではないので、思い込みという点では、さきの一条御息所に通うのだが、大君の場合、庇護者の体面意識が被庇護者を追い詰めるという構造が、父故宮から彼女へ、そして彼女から妹中君へと、二重に受け継がれて行くことになる。

中君が「人笑へ」を意識するのは、匂宮との初めての逢瀬の後、大君が、こうなったのも自分の謀った事ではなく、辛いことだが恨まないで欲しいという申し開きを聞いた折が最初で、この大君の言葉は衝撃に「我にもあらぬさま」（同271頁）にあった中君に現実の深刻さを認識させる事となり、「げにうしろめたくあしかれとも思しおきてじを、人笑へに見苦しきことそひて、見あつかはれたてまつらむがいみじさをよろづに思ひゐたまへり」（同272-273頁）と、姉の心配を汲んで匂宮との関わりがいずれ「人笑へ」になるかも知れないという不安を彼女に植え付ける。父から姉へと伝わった恥の意識が、妹に取り込まれ、それを継承するかのように、大君死後、中君も「人笑へ」への危惧に懊悩することとなる。それへの恐れは、匂宮に京に引き取られる直前にも現れ（「いかにはしたなく人笑はれなることもこそ」早蕨⑤352頁）、後日、匂宮と夕霧六の君の婚姻を知り「さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へにうきこと出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし」（宿木⑤383頁）と反芻される。「なほいとうき身なめれば」と宇治へ帰る

ことも思うが、それさえも「山がつの待ち思はんも人笑へなりかし」（同 383–384 頁）というジレンマに陥った中君は、山里を出るなという故父宮の遺戒を想起し、姉の深慮に比べて「亡き御影どもも、我をば、いかにこよなきあはつけさと見たまふらん」（同 384 頁）と自らを恥じる。保護者が被保護者に恥を意識させ、被保護者はそれに照らして我が身をつくづく情けないものに思うという構造がここにも見られる。

同じ事が腹違いの妹、浮舟にもあてはまる。いったい、「人笑へ」というタームは続編、特に宇治の三姉妹を巡って多出するが、この物語最後のヒロインに関連しても、母である中将の君や乳母、浮舟自身、女房右近とを合わせると、「人笑へ」「人笑はれ」が全九例という多数に及んでいる。初出は、母中将の君が浮舟の婿がねである少将の仲介人に「もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなんあるべき」（東屋⑥ 22 頁）と、男の意図を確認するコンテクストであるが、浮舟が継娘である事を知った少将は、あっさり、実の娘に乗り換えてしまう。このエピソードは、実父に認知されず、継父の後見も得られないこの女君の身の振り方がいかに困難を極めるかを決定づけるもので、それ以後、母そして乳母が会話文の中で「人笑へ」「人笑はれ」を繰り返すのも、まさしくここに端を発するわけである。ここには、認知されなかったとはいえ宮家の血を受けた娘がそれにふさわしいもてなしを受けられるように、という誇りと恨みをない交ぜにした中将の君の皇統への拘りがある。中君の恩顧を頼って滞在した二条邸で匂宮に迫られた後、乳母が「あが君は人笑はれにてはやみたまひなむや」（同 68 頁）と励まし、中将の君が「便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし」（同 77 頁）と嘆くのは、直接、浮舟に向かっての言葉であるが、前者は継父、少将、匂宮などを意識して、このように侮られるままのはずはないと、ある意味、既に軽んじられてしまっている立場をはしなくも追認する形となり、後者は匂宮の妻である中君をおもんばかって、匂宮との不祥事などがあったら、それこそ世間の物笑いになると、新たな危機の深刻さを娘に認知させる事になる。浮舟を「人笑へ」ならぬさまに、というこの二人の善

意の庇護者の念願は、およそ自分の意志というものを持たされていない女君を他律的に拘束する。恐れられていた匂宮との関係が結ばれてしまった後、それと知らぬ母や乳母が薫の処遇にようやく願い通りになったと随喜するのを見て、「けしからぬことどもの出で来て、人笑へならば、誰も誰もいかに思はん」（浮舟⑥ 164 頁）と悩み、もしそんな不祥事があったら娘を勘当するという母の言葉に「いとど心肝もつぶれ」、「つひに聞きにくきことは出て来なむ」（同 167 頁）と煩悶の挙げ句、「人笑へ」こそが自死をもってさえ避けるべき事態と認識されるに至る。

> さてもわが身行く方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじとしばしこそ思うたまはめ、ながらへて人笑へにうきこともあらむは、いつかそのもの思ひの絶えむとする（同 168 頁）

> 親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘れ草摘みてん、ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし（同 185 頁）

親にとっては、自分の死よりも「人笑へ」の方が耐えがたかろうというこの思惟は、この女君にとって、そういった親の拘りがいかに束縛となっているかを表すものである。しかし、「なげきわび身をば棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ」（同 193 頁）という歌に見られるように、浮舟は死んでも「うき名」がつきまとう危険を憂慮せざるを得ない。

この、どう身を扱っても悪評は避けられそうもないという苦悩は、さきの髭黒北の方や中君の、どちらに転んでも「人笑へ」という八方ふさがりの状況に通じるが、これは物語中「人笑へ」の初出である六条御息所に先取りされている。

つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとて立ちとまるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、釣する海人のうけなれや、と起き臥し思しわずらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましうしたまふ（葵② 30-31 頁）

六条御息所は、物語登場以来、一貫して、人の噂を気にし、それに絡め取られている。「人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世」（同 36 頁）、悪意の噂をこととする環境で、物笑いになり、最終的には真率な庇護者である桐壺院にまでも疎まれたらという恐れ、即ち貴族社会内で生きる場を失ってしまう最悪の事態を先取りしての恐怖が、遊魂現象を招き、それが更に懊悩を深める元となる、という展開をたどると、葵上との確執よりもこういった体面意識の方がこの人物の中核をなすと思われる。後に死霊となって六条院の秩序崩壊を促進する役割を果たす場合も、きっかけは源氏が紫上にその人となりを回想して「人見えにくく、苦しかりしさま」（若菜下④ 209 頁）と評したのを恨んでの事である。

人の物言いの恐ろしさ、恥を身の破滅として恐れる心性、その恐怖の自己培養が自身を追い詰めてゆくというテーマは、生霊、死霊への変身という異常な事態を付与されるまでに、この女君に重く担わされていると言えるが、「人笑へ」というタームに限ってみれば、伊勢下向が物笑いの種になるだろうというコンテクストで言われており、思考のモメントをなすものではあっても、もう一方の選択肢との葛藤を誘発するのみで、解決なり決断を導くわけではない。最終的に伊勢下向を決意するのも、生霊事件の後の源氏の「あさましき御もてなし」（賢木② 83 頁）に、彼との仲を断念せざるを得ないためであった。

身の破滅となる「人笑へ」を避けようという意志が女君たちの行動原理として働くことは、既に度々指摘されている通りだが、それ自体、必ずしも積極的、主体的な打開策をもたらすわけではなく、今までの例が示すところでは逆に懊

悩へのはまり込みをきたす場合が多いように思われる。

男女関係の蹉跌や崩壊がそれほど恥として認識されるということを思うと、男性との関わりがいかに根本的に女性の運命を左右するか、それがいかほど女性を生きにくくさせているかということに、今更のように思い至るのだが、そういった危機的状態を促進、かつ深化させる要素は孤独である。見てきたように、庇護者達は被庇護者を思いやっているようで、実は家の名誉をおもんばかっての事であったり、事実を誤認して独り決めしたりしている場合が多く、当事者との疎通は成立しない。更に、まさしく人の思惑を気にしての恥意識であるが故に、他に打ち明けるすべも無く、ひいては周囲の女房達にまで気兼ねするというパターンが、紫上、大君、中君に見られる。紅葉狩りに対岸まで来た匂宮が、中君を訪問せずに帰ってしまった後、「男といふものは、そら言をこそいとよくすなれ」（総角⑤298頁）と男性一般への不信、そして匂宮も例外ではなかったという失意と自分の浅慮への自責に苛まれた大君は、「ここにもことに恥づかしげなる人はうちまじらねど、おのおの思ふらむが人笑へにをこがましきこと」（同299頁）、ここには気の置けるような者はいないが、それぞれの思惑を考えると、物笑いに愚かしいことだと、女房達の侮りを気に病む。また、女房達の噂話に匂宮と夕霧六の君の縁組を耳にした時も「恥づかしげなる人々にはあらねど、思ふらむところの苦しければ、聞かぬやうにて寝たまへる」（同310頁）と、やはり女房達の反応を想像して心痛し、何も聞かなかったふりをする。両者ともにある、気後れするような者達ではないけれど、という但し書きが、かえって、同格あるいは上位の人々ばかりでなく、下位の者の見る目、評価も気に病まずにはいられない、つきつめた状況を浮き彫りにする。

妹の中君にも、匂宮と六の君との婚姻の晩、匂宮の仕打ちをあげつらい、さりとも深い契りに違うことはないだろうなどと言い合う女房達のコメントを、「さまざまに聞きにくく」（宿木⑤405頁）、聞き苦しい事と厭う場面があるが、類似の状況が女三宮降嫁の折の紫上の場合にも、「聞きにくし」という用語も共通して見られる。源氏の仕打ちを思わずなる事と危ぶみ、かといって紫上の

立場が貶められはしまい、などと不安げに取りざたする女房達の言葉に、当人は「かう人のただならず言ひ思ひたるも、聞きにくしと思して」（若菜上④66頁）、自分は殿のためにも女三宮のために良かった事と思っていると、女房達を諭す。吾が仏尊しとする女房達の身贔屓なコメントは、それ自体、好意的なものではあっても、ないがしろにされたのだと彼女らも思っている事を証すわけで、それに心痛する当人にとってはかえってみじめさ、辛さを増す効果しかない。侮られる事はもちろん、哀れがられる事も、当事者には屈辱的なのである。

既に様々に指摘されているように、登場人物達が「人笑へ」を意識する時、実際に物笑いの種となってしまっている場合と、まだそう至らないのを先取りする場合とがある。しかし、現実の裏付けがあるにせよ、無いにせよ、心の中で世の物笑いは必至と観念せざるをえないような状況に追い詰められた女君達が、では、何を拠り所にしてこの危機的状況を生き抜いて行くのか。一つの解答が紫上の身の持し方に見られる。女三宮の源氏降嫁の後、紫上は「人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなし」（若菜上④54頁）、華々しく降嫁したライバルに間の悪い思いをしながらも「つれなくのみもてなして」（同63頁）、女房達の嘆きも「つゆも見知らぬやうに」（同66頁）あらぬさまに物語などするという態度を一貫させる。それには、女房達の手前を繕い、動揺を隠すために身じろぎもせずに眠れぬ夜を過ごすといった、多大な犠牲が払われ、源氏を始め、周囲の人々に心を閉ざし、孤独の中に苦悩を内攻させる結果となるのだが、そのけなげさによって彼女は源氏のさらなる評価と信頼を得て、六条院の実質的な女主人として崩壊しつつあるその調和を主宰して行く。

自分が侮られるという恥じがましさが隠れ無きものであるという状況で、それに思い屈しているさまを決して見せまいとするこの態度は、実は髭黒北の方に先蹤がある。[9] 紫上の場合と異なって、髭黒北の方は、物の怪の発作ゆえに夫の心をつなぎとめる事ができず、上述のように結局はこれ以上の「人笑へ」を

避けようと、父兵部卿宮のもとに戻るのだが、不安や動揺を下に抑え、表向き何事のなかったかのように男に対するという身の処し方は、中君にも見られる。

中君は、夕霧六の君との縁組を聞いた際、やはり「人笑へ」は逃れられない宿命だったのかと、故人である父や姉にも恥じる前出の懊悩の果てに、「何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ」（宿木⑤384頁）のだが、同じ機微がいよいよ婚姻の晩、行き渋って中君と月を眺める匂宮に対する場面に、ほぼ用語も同じく再確認される。

> 女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなくさましたまふことなれば、ことに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはする気色いとあはれなり。（同402頁）

この決意は、先に引いた、女房達の取りざたを聞きにくく思うという一節に続く「今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見め」（同405頁）という一種の開き直りにおいて、あらたに堅固なものとなる。ここでいったん、他者の見る目を切り捨て、自分の見るところだけを拠り所にしようと思い切った中君は、これ以降、行く末に不安を抱き、日陰者の負い目を抱き続けながらも、二条院の女主人として成熟して行く。薫の横恋慕に悩み、夜離れが続いていた宮のにわかな来訪の際に、「なほいとうき身なりけりと、ただ、消えせぬほどはあるにまかせておいらかならんと思ひはてて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてゐたまへれば、いとどあはれに、うれしく思されて」（同433頁）と、我が身の宿命を観じ、生きてある限りは事のありように任せて、穏やかに振る舞おうと、宮を可憐に、愛らしい態度でもてなし、男のいとおしい気持ちをあおる。中君においても、紫上の場合と同様に、苦しさを必死にこらえて何気なく振る舞う女君のけなげさと、それでも悲嘆の様子が垣間見える哀れさが、男君の愛着を増す結果になるのである。

髭黒北の方、紫上、中君、いずれも、他の女性の出現によって自分のそれまでの地位がおびやかされ、それによって物笑いとなる事を思い悩むが、その事態をどうしようもないことだと自分に言い聞かせる点も共通する。髭黒北の方の「とどむとも」(真木柱③363)、紫上の「堰かるべき方なきものから」(若菜上④53頁)、中君の「かひなきものから」(宿木⑤384頁)、そのこと自体はいかんともしがたいという諦念は、こうなった事の責任を男に帰して責めたり恨んだりするのは空しい事という思いにつながるが、紫上や中君が、味方であるべき女房達の介入をも厭い、苦悩や悲嘆を悟らせまいとする態度には、それ以上の積極的な意志が働いているように思われる。世の聞こえを危ぶむ中で、自分がくよくよ思い悩んでいるのを周囲に知られるのは、さらなる屈辱だという、他者の眼差しをバネにしての矜恃、彼女達はそれ故に自らを抑制し、苦渋を我が身一つに引き受けて行く。

髭黒北の方の場合をおくと、紫上も中君も、何事もないような態度を自分に課する事で、かえって男君の愛情をつなぎ止め、六条院、二条院という環境の主宰者としてそれぞれの立場をあらためて確立する。たとえそれが、心と振る舞いという、内と外を峻別し、使い分ける、厳しい自己規制の上に得られたものであるにせよ、また彼女たちの悩みの解消にはほど遠い、どころか、女の身の憂さをつくづく思い知らしめる態のものであっても、まさにそれへの深い沈潜の故にディグニティを保ち得たという点に、積極的な意味を認めてよいのではないかと思う。

この恥の意識には、先述のように、現実の裏付けがある場合もない場合もある。ことほどさように他者の見る目というのは流動的でとらえ難いものと言えよう。ひるがえってイタリアの場合、行動の基準、特に危機においての対応という時拠り所になるのは、やはり信仰である。悲嘆にのめり込み、絶望し、自棄になるのを避けるため、要は、どうやって自分の状況を相対化、客体視するか、そのための装置がどこにあるかであって、それは大きく「他者」、自分の外にあるものの視点を導入することと言ってもいいかと思うが、同じ他者とい

っても、神という絶対的存在を基準とするのと、曖昧模糊とした部分も否めない世評を気にするのとでは、おのずと心の持ち方も違って来るであろう。教義などという形で明文化されておらず、とらえ難いからこそ、アンテナを研ぎ澄まし、多々思い巡らすという、いわば想像力の発動をより要請するのが他者の思惑である。誤謬や妄想もそこから生じるわけだし、どちらがいいという問題でもない。よく恥の文化などと言われるが、他人が自分をどう認識しているかを推し量り、それに準じて行動を規制するという心的回路が日本人にはかなり強く、根深くあることは確かなようで、それが危機をも招来もし、また危機への対処も導くわけである。

再び柳田国男の言葉を借り、「笑はれまいとする努力が、今日の道義律を打立て、又多くの窮屈なる慣習法を作って居る」⑩のだとすると、倫理、エティックではなく、美学、エステティックが優先する、というより美学が一つの倫理たりえているのも、また日本文化の特質なのかも知れない。

[注]

①鈴木日出男「人笑へ・人笑はれ」『源氏物語事典』(學燈社 1989) を始め、大森淳子「源氏物語「人笑へ」考」『名古屋大学国語国文学』69 号、原岡文子「『源氏物語』の「人笑へ」をめぐって」「浮舟物語と「人笑へ」」『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』(翰林書房 2003)、また北川久美子の一連の考察 (2000-2009)、など。なお、「人笑へ」「人笑はれ」の意味の相違、軽重についてはここでは触れないが、「人笑はれ」の方は比較的、男性登場人物の頻度が高く、また当人より別の人物に関わる場合が多い。

②引用は『新編日本古典文学全集　源氏物語　①-⑥』(小学館) による。

③「笑の文學の起源」『笑の本願』(『底本　柳田国男集』第七巻) 167 頁。

④原岡文子「『源氏物語』の「人笑へ」をめぐって」『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』(翰林書房 2003、初出『物語とメディア』有精堂 1993) 284 頁。

⑤朝顔に対する源氏 (朝顔)、玉鬘をめぐる兵衛督 (真木柱)、同じく玉鬘また女三宮を巡っての蛍兵部卿宮 (若菜下)。

⑥式部卿宮が真木柱を「この君をだに、人笑へならぬさまにて見む」というのは直接に髭黒北の方の不面目な進退を受けてのことである (若菜下④ 159 頁)。

⑦これが御息所の被害妄想でない事は、夕霧が「あはれ、げにいかに人笑はれなることをとり添えて思すらむ」(柏木④ 339 頁) と落葉の宮に同情し、父朱雀院も「二の宮もかく人笑はれなるやうにてながめたまふなり」(横笛④ 346 頁) と思いやるという事でも確認される。

⑧原岡文子「浮舟物語と「人笑へ」」前掲書 487 頁。

⑨雪を押して玉鬘を訪おうかどうか迷う彼を「いとおいらかにつれなうもてなし」、「夜も更けぬめり

や、とそそのかしたまふ。今は限り、とどむともと思ひめぐらしたまへる気色いとあはれなり」、それでも「なごやかに」夫に対し、かいがいしく装束の世話などするという描写（真木柱③ 363-364 頁）は、ほぼそのまま紫上に受け継がれている。

⑩前掲書、167 頁。

＊討議要旨

今西祐一郎氏は、「ディグニティ」の意味について質問し、発表者は、日本語訳の難しい言葉であるとことわりつつ、「尊厳」「品位」といった言葉に相当すると応答した。また、他国で起きた災害の報道ではそういった言葉は、あまり使用されなかったように思われるが、東日本大震災に関する報道では頻繁に使われた旨、発表者より補足があった。今西氏はさらに、「ディグニティ」という言葉の背景には神を信じることによって与えられた美質というニュアンスが含まれるのではないか、と質問し、発表者は、神に恥じないとの意識で「ディグニティ」を保つ、あるいは他者を許すといったことはあると応答した。今西氏は、『源氏物語』においては、神に恥じないというよりも人に恥じないという意識があるが、それが西欧の側から見て、神に恥じないという態度に捉えられているといった認識の違いがあるのではないかと指摘した。海野圭介氏は、宇治十帖の背景にある信仰について海外の人にとってそれがどのような形で理解されているのかを質問し、発表者は、難しい問題としつつ、キリスト教の神をそのまま当てはめて解釈している場合もあり得るが、源氏物語を選択的に読むほどの人は、信仰の問題に対しては柔軟に対処していると思う、と応答した。